

受付番号

留学・研究計画書

氏名 山下真吾	留学機関 名 イスタンブル大学
留学先国名 トルコ共和国	留学期間 西 2009年4月～2011年4月 暦
研究テーマ 15世紀から16世紀オスマン朝の歴史記述と政治的思考の関係—アフメディーからムスタファ・アーリーまで—	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>中東とイスラームについて、特に9.11事件以降、信仰としてのイスラームと中東イスラーム圏に固有の思考様式が注目を集め始めている。しかしながら本邦においてはこの方面における研究は以前に比べれば多様化したものの、未だ多くの欠落が残されている。中東イスラーム圏に固有の思考様式を理解するためには、歴史と文化的背景に遡って考究する事が必要となる。本研究ではその一端を明らかにすべく、現代中東において重要な国の一つであるトルコ共和国の前身であるオスマン朝を例にとり、とりわけ形成・興隆期にあたる15・16世紀を対象として、歴史的思考と政治的思考の各々の特質と、両者の関係について明らかにする事を目指す。</p> <p>オスマン朝は、14世紀に小君侯国として出発し、15・16世紀を通じて成長し、16世紀中葉に最盛期を迎え、16世紀後半に停滞期を迎えた。そしてオスマン朝の歴史家達は、オスマン朝の興隆の意味を歴史の中に見出そうとし、特に16世紀後半に至ると、同時代の停滞と混乱が初期の興隆と対比された。こうした流れにおいて歴史家達は、伝統的な政治的思考に照らし合わせて歴史的諸事件を解釈し、記述した。すなわち、神が人間の中からある者を選んで王として定め、また民は神から王へ託されたとし、それ故、王は神に責任を負い、王の統治のあり方が王朝の興隆と衰退を決めるという思考法に基づき、オスマン朝の興隆や、征服の停滞などが解釈されたのである。例えば15世紀前半には、オスマン朝の歴史記述の先駆となったアフメディー (d. 1414) が、歴史記述の形を取りながら、その中で統治の要諦や君主のあるべき姿についての知恵を説いた。この伝統はアラブ・イランの中世の文化・思想伝統に根源を持ちながら、後代にも受け継がれ、とりわけ16世紀初頭の拡大期におけるイドリース・ビトリースィー (d. 1520) や、16世紀後半の停滞期に現れたムスタファ・アーリー (d. 1600) においては体系的な形で表現された。そして上記の三者はそれぞれの時代の歴史解釈と政治的思考との関係を知る上で重要である。また彼らの著作には、政治的思考に関わる作品があり、これら作品は彼らの歴史記述と歴史認識を理解する上で極めて重要である。</p> <p>従来、歴史記述と政治的思考の関連という観点からの研究は不十分にしか行われてこず、この点で本研究は大きな学術的意義を有する。またこの研究を通じて中東イスラーム圏に固有の思考様式と、政治的な思考の一面を、歴史的背景と文化的伝統に遡って明らかにすることができる。そしてこのような知見を踏まえてこそ、現代トルコのみならず、現代中東イスラーム圏社会に生起する様々な事象をよりの確に理解できるのである。本研究は、歴史的存在としてのオスマン朝における歴史的思考と政治的思考との問題史的分析であると同時に、現代を理解するための歴史的背景と文化的伝統を明らかにし、現代中東情勢をよりの確にとらえる試みである。</p>	

成果報告書

記入日 2011年 5月 12日

氏名 山下真吾	留学先国名 トルコ	所属機関 イスタンブル大学
研究テーマ：15世紀から16世紀オスマン朝の歴史記述と政治的思考の関係 － アフメディーからムスタファ・アーリーまで －		
留学期間	2009年 4月	～ 2011年 4月
<p>当報告の報告者は2009年4月から2011年4月まで、上記の研究テーマにおいてトルコ共和国イスタンブル大学受入として留学し、研究を行った。</p> <p>5月以降本格的に研究をスタートさせ、在イスタンブルの写本図書館、文書館を中心に史料収集に当たった。利用した図書館は、スレイマニエ図書館、バヤズィット国立図書館、ミット図書館、キョプリュリュ図書館などである。研究テーマに関わる写本史料を、その書誌的観点から、また内容的観点から検討した。15・16世紀オスマン朝における文化や思想の発展を解明し、上記の三者の作品を他の文人達の系列の中に位置付けるために、またそれだけでなく上記作品がオスマン朝以前の諸王朝から継承した世界観、宗教的観念や、文学伝統を跡付け、上記作品の内在理論を明らかにするためにこれら写本の分析を行った。また、これまであまり注目されてこなかった写本史料の発掘を進めた。この作業の過程で、オスマン朝における歴史記述、政治的思考の発展を明らかにする重要な史料を収集・発見することができた。</p> <p>また一方で、当研究にとって重要なアフメディー、イドリース・ビトリースィー、ムスタファ・アーリーを同時代の著述・思想の流れの中に位置づけるために、同時代の関連する分野で著述を行った著述家たちを、伝記史料などを利用し、網羅的にプロファイリングを行った。出自、経歴、著作の分布などの観点から、利用できる伝記史料、先行研究などを利用して情報をまとめ、この情報を写本史料の収集・分析にも生かしている。そして同時代の文人たちの間で上記の三者がどのような位置を占めているのかについての知見を得るための重要なデータベースが構築されつつある。</p>		

また、上記の三者の著作について、この三人の文人の諸作品における歴史記述と政治的思考の関係を明らかにするために、写本史料、刊行史料を収集し、その分析に当たった。これらの著作のうち、一部はごく最近刊行され、それを知ることができたのはトルコ留学中の大きな成果の一つであろう。しかし、彼らの重要な著作である「アレクサンドロスの書」および「八天国」はいまだ写本の状態であり、またテキストの校訂も一部分しか行われていない。この点に鑑み、さらなる写本史料の研究を行うことを検討中である。また、写本史料、刊行史料に基づいて上記の三者の著作群に見られる、内在的論理の分析を行い、他の文人たちの作品、前時代の諸作品との比較が行える程度にその考え方、議論の形式を明らかにすることができた。

留学 2 年目における研究としては、一年目にはまだ利用しなかった図書館（イスタンブール大学希少写本図書館など）を中心に利用した。この過程で、同図書館に所蔵されていた希少写本の調査を行った。これにより、15・16 世紀にオスマン朝で書かれた歴史書の一部を構成する戦記文学（ghazâvât-nâme）の収集、文人の系列を明らかにするための史料としての詩集（dîvân）の分析を行う事ができた。またオスマン朝時代に作成された行政文書の大半を所有する総理府オスマン朝文書館を利用し、文書史料の収集と分析に当たった。ここでは特に、同時代の文化や思想の発展を解明するための基礎的作業として、当時の本がどのように読まれ受容されていたのかを明らかにするために、オスマン朝時代にスルタンやその他の政府高官などによって建設された図書館の記録、宮廷や諸図書館における蔵書目録などの収集と検討を行った。この調査によって重要な文書史料が多数発見され、オスマン朝時代に建てられた主要な図書館における蔵書数および、その時代的推移、蔵書中における個別の書籍のタイトル・冊数・ジャンルなど詳細な情報が入手された。これらのデータをもとにして当時の諸図書館においてどのような図書が所蔵され利用に供されていたのか、また重要視されたジャンルや作品は何であったのかが明らかになる。

また、スレイマニエ図書館での調査も継続し、2 年目は特に、文書館での調査とリンクさせ、同図書館のいくつかの下位部門に所蔵されるコレクションの書誌情報を網羅的に分析した。これらコレクションは最古のもので 114 世紀にはオスマン朝によって所蔵されていたことが判明し、あるコレクションがどのように形成されたかを解明するうえで極めて重要なデータが収集できた。一方、これらのデータはある写本が作成されてから、個人に購入され、図書館に寄贈されるまでの大まかな記録を含み、当時の書籍流通・所蔵・利用のあり方を解明する上でも極めて重要である。

そして、2年目はイスタンブールのみならずトルコの他地域に所在する写本図書館の利用、トルコ国内外における調査・発表、2010年のトルコにおける日本年をきっかけとした催し物への参加・準備の手伝いなどを積極的に行った。

これらのうち主要なものを書き出すと、まずスペインのバルセロナにおいて夏に開催された世界中東研究学会大会での英語発表がある。2000人規模の研究者が集まり行われたこの大会において、報告者は、自身の研究成果を国際的に集まったオーディエンスに対して発表するという経験をつむ事ができただけでなく、世界各地から集まった多様なフィールドで研究する研究者の発表を聞く事によって、中東研究の各方面における最新の動向、各分野において重要な研究者などを知ることができた。

そして、秋にトルコのブルサにおいてトルコにおける日本年のきっかけで開催された展覧会の準備を手伝った。この過程で、展覧会の組織・準備の過程を間近に見ることによって、これらに必要な知識・経験を吸収することができた。また、準備の合間にブルサの旧市街を見学する事によってオスマン朝の古都であり最初の首都でもある同市の特徴などを肌身をもって知ることができた。

また、イスタンブール・オカン大学で開かれた「トルコ政治学学会」の大会に参加しトルコ語で研究成果を発表し、経験をつむとともに報告者の研究領域に関わる諸分野においてどのような研究が行われているのかを知ることができた。

この他、報告者は、2010年にヨーロッパ文化首都となっているイスタンブールにおいて活発に開催されているオスマン朝史関係のシンポジウムなどに参加し、知見と人脈を広げるよう努力した。

また、現地の研究者と積極的に交流し、人脈を広げるとともに、研究に関連する情報を収集した。また授業などにも積極的に参加し、ペルシア語文献読解、スーフイズム文献読解、研究に必要な知識を身につけるよう努力した。

また写本整理プロジェクトに参加し、写本史料を扱う上で必要な書誌情報の収集の技法を学ぶとともに、写本史料を分析する上で必要になる諸知識をも吸収することができた。

また留学の全般的な感想を以下に述べる。報告者は、トルコに到着してから現地の友人の助力を得て、住居の確保に努めた。具体的にはイスタンブル旧市街でアパートを探した。これは友人の助力により比較的順調に進んだ。また、居留許可証の取得、電気・ガス・水道の登録には1～2週間ほどかかった。特に現在、トルコにおける居留許可証の取得の制度が変更されており、まずオンラインから申請し予約を取った上で手続きする方式に改められている。また、電気・ガスなどを開くためには居留許可証が必要となり、段取りよく手続きする必要があるだろう。

現地では外食はそれほど安くなく、自炊の方が節約できることもあり、できる限り自炊に努めた。トルコでは米が日本と同じ程度の価格で売られているが、品種が違うためか日本の方式で炊くとあまりおいしくなく、途中からトルコの油を使いながら炊く方式に切り替えた。この点でパーソナルライスクッカーなどを日本から持っていけばよかったと後から考える。

また、パン、野菜類が非常に安く手に入るので夏は比較的少ない手間暇で健康的な食生活が送れるが、冬になると野菜を生で食べるのがつらくなるので、温野菜を手軽かつおいしく食べられる方法を検討した。一方で、現地の研究者などと交流し人脈を構築するためにはどうしても外食が多くなるという傾向があり、この点は必要な経費と割り切って費用を見込んでおくということも必要だと感じられた。

住んでいる場所が旧市街の交通の要衝であるアクサライの近辺であることもあって、バス、路面電車、地下鉄を利用してイスタンブルの重要な場所に比較的簡単に出ることができる。料金は、最近ではアクビルと呼ばれるタッチ式のチャージ式の料金支払い手段が普及しており、これを利用するのが便利である。

イスタンブルは都市化・近代化が進んでいるので生活面での違いはそれほど見られないものの、文化面・思考面での違いがあり、しばしば驚かされることもあり、しばしば新たな発見をすることがある。こうした経験は研究にフィードバックされるのみならず、自身が所属している文化を相対化して考える際にも役立つ。

また、トルコと日本の間で制度が異なる点が多くあり、また外国人として居留するためいままでも経験した事のない手続きが必要になることもあった。このため窓口の係官とのやり取りや手続きそのもののやりかたをめぐって多くの困難に見舞われることが多々あった。こうした問題に対処するにはやはり事情を知っている現地のトルコ人の知り合いや友人に相談して、また時には助けをもらうことが不可欠になると感じた。